

第32回 企画展

不朽の名宝 湖東焼

会期：令和2年9月10日(木)～10月18日(日)

場所：愛荘町立歴史文化博物館

展示作品解説書

■ はじめに

焼物が人々の生活に深く浸透した江戸時代、各種多様な焼物が作られました。湖東焼は、文政12年(1829)に彦根城下の商人・絹屋半兵衛とその仲間によって開窯されました。天保13年(1842)、経営が厳しかった絹屋の窯は彦根藩に召し上げられ、時の藩主・井伊直亮のもとで新たに藩窯として再始動しました。そして、井伊直弼の時代に湖東焼は黄金時代を迎え、数多くの逸品が誕生しました。湖東焼の名は揺るぎないものとなりました。

湖東焼には様々な絵付師が関わっており、彼らが黄金時代の一端を担っていました。

展覧会では、半兵衛、直亮、直弼の三人が湖東焼にどのように関わったかを、数々の作品とともに紹介します。

■ 湖東焼の歴史

湖東焼は、彦根城下の外船町に店を構えた古着屋商人の絹屋半兵衛によって始まった。

文政12年(1829)、半兵衛は京都に来ていた伊万里の職人を伴って帰り、仲間の島屋平助と西村宇兵衛を誘い、共同出資の形で磁器を焼く窯を興した。彼らは町奉行に願い出て、城下町の西方にある芹川左岸さらしやまの晒山に窯を築き、細工場を建てた。

初窯は失敗し、2度目の窯はなんとか成功し、藩主に献上できるまでになった。しかし、仲間の平助が事業

から降り、窯場も佐和山山麓もちのきだにの餅木谷に移すことになった。ここでの初窯は成功する。ただ、経営難だった状態は変わらず、宇兵衛も窯を去ったことで、天保2年(1831)からは半兵衛単独で事業を続けることになった。

絹屋の窯は、天保13年(1842)に彦根藩に召し上げられ藩窯となった。藩主は井伊直亮なおあきだった。美術品の愛好者であった直亮の元で、湖東焼は洗練された高級品生産に拍車がかけられた。

嘉永3年(1850)に直弼が13代藩主になるとすぐに、窯の拡大と職人の獲得や養成に着手した。藩内から子どもを招き、良工の下で技術を学ばせて将来の良工にさせる人材育成計画「御抱子供稽古人の制」を設けたのもこの時期である。

安政2年(1855)に藩窯の大改革が行われた。窯場の規模を2倍にし、それに見合う職制も拡充した。これにより湖東焼の黄金時代が始まった。

安政7年(1860)3月3日、桜田門外で直弼が暗殺されると窯場の状態は一変した。湖東焼は後援者を失い、藩が苦境に立たされたため、約半数近くの職人は出奔してしまった。その後約2年間は残った職人たちの手で窯の火は続いたが、職人の減少の影響で、文久2年(1862)に幼君直憲の代で藩窯は21年の歴史に幕を閉じた。

その後、窯場の設備・器具・材料などの払い下げを受けた山口喜平らにより、民窯として明治28年(1895)まで細々と存続していた。

絹屋 半兵衛

絹屋半兵衛は、彦根石ヶ崎町の八木田屋九右衛門の長男として生まれ、幼名は新次郎といった。

古着商の仕事で来た京都で、清水坂や五條坂の窯業の隆盛を見て焼物への興味を高めていった。有田地方の陶工から勧誘を受けた際に起業心を動かされ、その陶工を連れ帰って窯を始めた。文政12年(1829)の10月、彦根城南の晒山に細工場を建てた。当初湖東焼は半兵衛の他に、彦根城下で同じ古着商を営んでいた油屋町の島屋平助と、御蔵手代の沢町の西村宇兵衛の3人で始まった。

しかし、仲間の脱退のため、天保2年(1831)から半

兵衛単独で事業が進められた。半兵衛には善左衛門という息子がおり、書に長けていたことで、帳簿の記入や焼物の売捌で半兵衛を手伝っていた。

半兵衛は、天保5年(1833)と天保12年(1841)の2回、彦根藩から資金援助を受けている。1度目は銀5貫目、2度目は銀15貫目である。2度目の援助を受けた時点ではまだ1度目の返済を完了できておらず、経営は順調とはいえなかった。

天保13年(1842)に絹屋窯が彦根藩に召し上げとなり、半兵衛が湖東焼に関わることは無くなった。

万延元年(1860)6月15日、70歳で没した。



染付鮑形菊図菓子器



菓子器 裏面

井伊直亮

井伊直亮は、寛政6年(1794)6月11日に彦根藩井伊家11代直中の三男として江戸で誕生した。文化9年(1812)2月5日の19歳のとき、家督相続をして藩主となり、同7日に掃部頭と称した。

井伊家は代々、将軍権力を支える「溜詰」大名として将軍を補佐し、時には大老職をつとめる家柄だった。直亮も先例に倣い、天保6年(1835)12月23日より同12年(1841)5月13日まで大老職をつとめている。

直亮は、雅楽器を中心とした美術品愛好家であることは有名であり、収集品の中には焼物も多く確認されている。

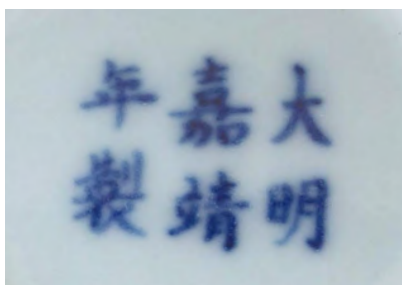
絹屋窯が出来て間もない時期に直亮は見学に訪れており、その見学に2時間以上を費やしている。早い時期から藩内の焼物に関心があったことがわかる。天保13年(1842)に、絹屋窯は彦根藩に召し上げられて藩窯になったが、これには直亮の意向が大きく関わっているとされている。

湖東焼は直亮のもとの、彼の趣味に叶うものや、高品質の製品生産に力が入れた。瀬戸や九谷、京都から職人を招き、施設も大幅に増改築した。直亮は、錦手、金襴手のような精巧絢爛なものを好んだ。

直亮は湖東焼に大きな期待を抱いていたが、本腰を入れる前に、嘉永3年(1850)に没した。



染付山水図香炉



「大明嘉靖年製」銘

井伊直弼

井伊直弼は、文化12年(1815)10月29日に井伊直中の19番目の子として生まれた。

天保2年(1831)に父直中が亡くなると、世継ぎではないことから城下の御屋敷「埋木舎」で生活することになる。弘化3年(1846)、彦根藩の世継ぎだった兄直元の急死により、急遽世継ぎとなった。嘉永3年(1850)8月に先代直亮が死去し、直弼は13代彦根藩主となった。安政5年(1858)4月23日に大老職に任命されたが、安政7年(1860)3月3日、桜田門外の変により暗殺された。

直弼は「埋木舎」での生活の間、居合、和歌、茶など多岐にわたって文武両道に励んでいた。他に楽焼も嗜んでおり、それが湖東焼に強く惹かれる理由の一つと

考えられる。藩主となってからは、窯の拡大と職人獲得や養成に力を注いだ。窯は従来の5間から7間にし、職人の数は最盛期には50人を超えていた。

殖産興業策と生産コストを度外視した優品の焼成という矛盾する生産体制の中で施設と陣容を拡大し、黄金期を迎えることとなる。この優品に対してのみ「湖東」の字を記すことを許した。

直弼は、湖東焼の優品を彦根の特産品として、他の大名への贈答に用いていた。また、政務の合間に精励した茶の湯でも、湖東焼の茶道具を「好み物」として製作させている。直弼は、自ら下図を描いて自分好みに製作するように指示することもあった。



色絵柘榴文三つ組盃



「湖東」銘

幸斎

氏は岡で、もと飛騨高山の僧、後に還俗した人物である。紀年銘作品が現存していないため詳細は不明だが、「嘉永年中」の銘が施された幸斎絵付の急須と煎茶碗が伝存していたことから、同年の初頭には客分待遇の絵付師として彦根で活動していたと考えられる。

藩主になる前から直弼は、幸斎の絵付師としての能力を高く評価していた。嘉永3年(1850)7月26日付けの幸斎と親しい御典医の上田成判に宛てた手紙には、1、2年で彦根を去った幸斎をあと3年ほど留め置くようにと依頼している。

《赤絵金彩恵比寿大黒図煎茶碗》解説

側面に恵比寿と大黒点を、内面に波に千鳥図を赤絵金彩で描く。側面には大黒に関する文言が書かれている。

直弼はこの赤の色調を好まなかったらしく、別の製品の注文の際に明確に赤の色調を指示している。



赤絵金彩恵比寿大黒図煎茶碗



「於テ湖東幸斎」銘

鳴鳳

かつては京都「てんぶう院」の寺侍であったと伝える。嘉永5年(1852)頃、妻子と弟の鸞英(一説に鸞斎)とともに彦根に来たといわれる。

書画や俳句も嗜み、茶道にも通じた文人で、弟の鸞英も漆芸の堆朱を良くしたという。彼らは城下東方の裏新町(現在の彦根市船町付近)に住み、鳴鳳は北に位置する松原内湖や住居付近を流れる猿ヶ瀬川で上絵付の合間を縫って釣に興じていた。

幸斎と交代するように京都から彦根へ来たが、安政元年(1854)よりさほど時を経たずに彦根を去った。

作品によっては銘を削り取られ、その上から「自然斎」の銘が書き直されているものが存在する。

《五花乃蟲図茶碗》解説

側面を赤絵金彩、内部の蟲を色絵で描いている。蟲は鈴虫4匹と蠅螂1匹が施されている。蠅螂は「拝み虫」とも呼ばれており、縁起物として扱われることがある。

何度か使用されたようで、触角が消えかかっている鈴虫が存在する。



五花乃蟲図茶碗



「鳴鳳」銘

自然齋

氏は岩根、名を治平、後に治右衛門と称した。本業は中山道の鳥居本宿で「米屋」という旅館を営んでいた。「自然齋」は号の1つで、他には「鶴霞楼主人」などもあり、称号は「誠有」と称した。

若くして彦根藩士・中島安泰より絵を学び、安政初年頃から赤絵を主とした上絵付を始める。特に藩より免許を得た後は、本業の合間ながらも自宅で精力的に上絵付を行い、数多くの作品を世に残した。嘉永3年(1850)、若干30歳で絵師として精進するために法体となり、この頃に直弼から「自分に自然にあるように」と「自然齋」の号を賜った。

《青磁釉赤絵金彩山水図蓋置》解説

この形状は、「一閑人」という井戸を覗き込む人が付いた蓋置で、柄杓や合を乗せるために用いる茶道具である。

自然齋の銘は人の右隣に書かれており、内面には「湖東」の銘が書かれている。



青磁釉赤絵金彩山水図蓋置



「琵琶湖畔自然齋造」銘

床山

氏は石崎、名を右平次と称し、芹橋に居を構えていた元彦根藩の足軽である。病に伏せて隠居する際に、中山道筋の原村に移り住み、湖東焼きの上絵付を始めた。

自然斎同様、中島安泰に絵を学び、赤絵や赤絵金彩、色絵などの上絵付を行った。銘は「床山」もしくは「床山玉兎」と記すことが多い。床山の銘は、壬申の乱の戦場や『万葉集』を始めとする歌集、紀行文にその名が散見する原村付近の山「鳥籠山」の名に因んで名付けられたという。

《赤絵金彩西園雅集図煎茶碗》解説

外面には西園雅集の様子を描き、内面には鯉に乗った琴高仙人を描く。

西園雅集とは、宗の円通大師が文人の墨客を西園に招き一日を清遊したという故事である。



赤絵金彩西園雅集図煎茶碗



「床山」銘

賢友

名を松之介といい、自然斎・床山・赤水がそれぞれ中山道筋に居を構えたのに対し、城下に居住していた。銘には「賢友」とともに「琵琶湖音」と付記したものがある。藩のお抱え職人でもあり、藩窯仕事の合間に自宅で上絵付を行っていた。そのため、藩窯の作品の中にも賢友の手掛けた無銘の作品が多く含まれていると思われる。藩のお抱え職人は自分の銘を入れることは禁じられていたが、株仲間は銘を入れることが出来た。賢友は株仲間に参加していたため、賢友の銘が残っている。

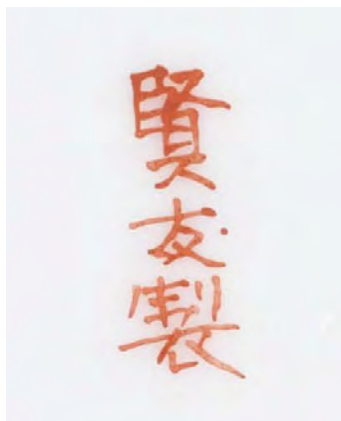
《赤絵金彩愛連説中皿》解説

北宋の学者である周茂叔の愛連説の前半を書き、下部には周茂叔と侍童を描いている。

愛連説は室町時代に日本に伝わっており、禅宗寺院で愛読されていた。



赤絵金彩愛連説中皿



「賢友製」銘

赤水

名を善次郎といい、銘には「赤水」のほか、「清渭堂」がある。高宮宿にある高宮神社の北に居を構えており、周囲の人々から「赤絵屋」と呼ばれていたという。絵は高宮の上田（善田）華堂に学んだ。明治初年に伊勢の四日市（現・三重県四日市市）に移り、萬古焼の上絵付を行うが、後に自ら窯場を経営して財を成したと伝えられる。

《赤絵金彩赤壁図菓子鉢》解説

湖東焼の題材に多く用いられている赤壁賦は、中国の北宋で作られた漢詩である。情景だけを描く場合や漢詩だけを書く場合、両方を描く場合がある。

今作は舟が描かれた対面部に赤壁賦の冒頭が楷書で書かれている。



赤絵金彩赤壁図菓子鉢



「赤水 福」銘

可水

人物像については不明なところが多い。「蟠龍軒可水製」の銘から、その名は槻御殿（現・楽々園）にあった茶室・蟠龍軒の井戸に由来する直亮時代の藩士だった可能性も指摘されている。

可水の銘がある作品は希少であり、特徴も掴みきれていない。

《色絵牡丹に蝶図筒向付》解説

内面に一枝の牡丹と4羽の蝶を描き、外面には満開の牡丹と蝶を描く。

頻繁に使用されたらしく、内面の牡丹が消えかかっているものもある。

一般的に知られる可水の銘は細字であるが、今作の可水の銘は珍しく、太めの筆跡である。



色絵牡丹に蝶図筒向付



「湖東可水」銘

その他展示作品



寄向付



色絵七福寿三つ組盃



染付釣瓶



赤絵金彩楓図中皿

【参考文献】

北村寿四郎1924『湖東焼之研究』湖東焼の研究出版社後援会

山本勇三2007『湖東焼私考』文芸社

谷口 徹2007『湖東焼 たねや美濠美術館図録』たねや近江文庫

谷口 徹2008『幻の名窯 湖東焼』（改訂版）サンライズ出版株式会社

愛荘町立歴史文化博物館2014『湖東焼鑑賞のススメ ―地域で愛される焼物―』

彦根城博物館2014『井伊直弼 一百五十年目の事実―』

滋賀県陶芸の森陶芸館2016『珠玉の湖東焼』

彦根城博物館2016『コレクター大名井伊直亮 ―知られざる大名コレクションの全貌―』

第32回 企画展

不朽の名宝 **湖東焼**

展示作品解説書

【編 集】山本剛史(愛荘町立歴史文化博物館)

【発 行】愛荘町立歴史文化博物館

【電 話】0749(37)4500

【発行日】令和2年(2020)9月10日

©2020 愛荘町立歴史文化博物館